

戦前期における「法政大学史」：明治30年代から戦時下まで

古俣, 達郎 / KOMATA, Tatsuro

(出版者 / Publisher)

HOSEIミュージアム

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

BULLETIN OF HOSEI UNIVERSITY MUSEUM / HOSEIミュージアム紀要

(巻 / Volume)

2

(開始ページ / Start Page)

26

(終了ページ / End Page)

40

(発行年 / Year)

2022-03-09

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00025247>

戦前期における「法政大学史」—明治30年代から戦時下まで—

古俣 達郎

はじめに

法政大学は2030年にその創立から150周年を迎える。現在、法政大学史委員会を中心に、「法政大学150年史(仮)」の刊行に向けて、様々な観点から検討が行われており、2020年から、その編纂事業の一環として、「歴代総長・理事へのオーラル・ヒストリープロジェクト」が開始されている¹。

さて、本稿では、そうした「法政大学150年史(仮)」に向けた取り組みが開始される中で、一度、これまでの法政大学史編纂の歩みを振り返る作業を行いたい²。こうした作業が、これまでの法政大学史(編纂)の意義、そして、残された各種課題や問題点等を検討するための一助となれば、本稿の目的は達成されたこととなる。また、出来得る限り、法政大学史編纂にかかわった人々を紹介したいと思う。明治期から現在まで、法政大学史の編纂には教員だけではなく、校友や職員など様々な人々が携わっており、そこには多くの記憶されるべき人々がいる。なお、本稿では、検討の対象とする時期を戦前期に限定し、戦後の法政大学史編纂の歩みについては、別稿を予定している。

1. 明治30年代の「法政大学史」³

判明している限り、法政大学の成員が自らの学校の来歴とその歴史を記した—正確には語った—最初の資料は、1901(明治34)年7月、

和仏法律学校第17回卒業式における校長富井政章⁴の「学事報告並ニ訓誨演説」である⁵。

この演説の中で、富井は学校の創立から語り始め、「最初ハ故薩埵正邦君ガ駿河台ニ東京法学社ト云フモノヲ起サレマシタ、其時期ハ確トシタ所ハ分カリマセヌガ明治十二三年ノ間デアリマス、幾ラ遅クトモ十三年ノ夏ヨリ、新シイコトハアリマセヌ」⁶、と明治12、13年頃に富井の義理の兄弟でもあった薩埵正邦⁷によって東京法学社は設立され、「本校ガ私立学校中ニ於テ最モ古イ」、「何トナレバ十四年前ニ創立セラレタル法律学校ハ他ニ一モナイト信ジマス」⁸と、日本の私立法律学校の中で最も古い学校であることを強調している。1881年に東京法学校へと改称してからは、同校の主幹に就任した薩埵と薩埵の恩師であり、東京法学校教頭に就任したお雇い外国人G・E・ボアソナードのもと、学校が発展していき、1889年に東京法学校と東京仏学校が合併し、和仏法律学校となった後には、梅謙次郎校長兼専任理事の尽力により、法人組織となり、事務組織の整理、学科の改良、教員の増嘱が図られ、講義録の評判も相まって、学校として大いに「拡張」していった、と述べられている。また、薩埵による創立以来の「本校ノ特色」「方針」が次のように語られていることも注目される部分である。

本校ノ特色ト申シテ宜シイカ、創立以来故

法政大学史主要刊行物・資料

1901 (明治 34)	富井政章「学事報告並ニ訓誨演説」
1903 (明治 36)	「私立法政大学一覧—沿革略」
1907 (明治 40)	石原三郎「法政大学の過去及現在」
1909 (明治 42)	『法政大学参拾年史』
1928 (昭和 3)	横山寛平「法政大学五十年観」
1941 (昭和 16)	「法政大学六十年史」
1958 (昭和 33)	霞五郎『お濠に影をうつして 法政大学八十年史』
1961 (昭和 36)	『法政大学八十年史』
1962 (昭和 37)	『法政大学写真集』
1971 (昭和 46)	『大学シリーズ 法政大学』(毎日新聞社)
1978 (昭和 53) ~現在	「法政大学史資料集」
1980 (昭和 55)	『法政大学百年史』
1980 (昭和 55)	『法政大学の100年 1880-1980』
1980 (昭和 55)	『法政大学体育会史』
1980 (昭和 55)	霞五郎『法政大学 物語百年史』
1993 (平成 5)	『法律学の夜明けと法政大学』
2000 (平成 12)	『法政大学 1880-2000 そのあゆみと展望』
2004 (平成 16)	『法政大学と戦後五〇年』
2006 (平成 18)	『法政大学図書館一〇〇年史』
2017・18 (平成 29・30)	『法政大学と出陣学徒』(事業報告書)
2020 (令和 2) ~現在	『HOSEI ミュージアム紀要』

*学部史、付属校史、体育会各部部史等は掲載していない。

薩埵君ヲ始メトシテ校員一同ガ確守シ来ッ
タ方針ヲ申上ゲネバナリマセヌ、ソレハ総
テ外觀上ノ華美又ハ虚勢ヲ求メナイコトデ
アル、巨多ノ卒業生ヲ作ッテ其頭数デ勢力
ヲ取ラウト云フヤウナコトハ少シモ計ラズ
シテ成ルバク日常真面目ニ教導シテ、真ニ
世ノ中ニ出シテ信用アリ、学力アリト言ヘ
ル者ヲ出ダスコトヲカメタノdeal⁹

それにしても、この卒業式で富井が学校の歴史について語り始めた理由や意図はどこにあったのだろうか。

第一に、その当時、和仏法律学校の起源につ

いて誤った認識が流布していた点が挙げられる。例えば、明治30年代の法律学校を紹介した代表的な文献である、三島駒治編『九大法律学校大勢一覧』(東京法友会、1898年)には、和仏法律学校の「起源及沿革」について、「本校ハ元東京法学校ト称シ実ニ明治十六年ノ創設ニ係レリ蓋シ当時ノ校場ハ神田小川町ニ在リテ」¹⁰と記されている。1883年から教員を務め、薩埵の親しい友でもあった富井であれば、このような薩埵の功績を忘れ去るような誤った歴史認識は許容しがたいものがあっただろう。

第二に、富井は長く校長を務めるつもりがなかったことが挙げられる。富井は兼ねてより、

病弱であり、講義も休講が多かったという¹¹。富井が校長に就任したのは、前校長で、まもなく法政大学総理に就任する梅が文部総務長官に就任したことにより、一時的に校長を辞任していたためである。おそらく、富井は自身が校長を務めている間に、薩埵の存在を皆に想起させたかったのではないだろうか¹²。

富井の演説から2年後の1903年10月、和仏法律学校は専門学校令による認可を受け、法政大学と校名を改め、法律学及び政治学の専門学校としてより一層の発展が図られた。その際に『法学志林』臨時増刊第48号に掲載されたのが、「私立法政大学一覧一沿革略」¹³（以下、「沿革略」と表記する）である。これは専門学校令認可により、新たな門出を迎えたことから、これまでの学校の歴史を紹介するために、学内の機関誌の役割をも担っていた同誌に掲載されたものであろう。

先の富井の演説と「沿革略」で大きく違っているのは、創立の事実関係の部分である。「沿革略」の明治12（1879）年の事項には次のように書かれている。

明治十二年二月薩埵正邦、橋本胖三郎、大原謙三郎、堀田正忠、金丸鉄、伊藤修ノ六氏法律学研究ノ目的ヲ以テ東京法学社ヲ神田区駿河台西紅梅町ニ設立セリ是レ本大学ノ前身ニシテ又実ニ本邦私立法律学校ノ嚆矢タリ¹⁴

このように、「沿革略」では創立の年月が明治12年2月に特定され、創立者として薩埵以外に橋本、大原、堀田、金丸、伊藤の5名が加わり、また、創立の地についても神田駿河台

の西紅梅町に絞られたのである。この間、上記の記述を裏付けるような資料的な発見があったのか、今日では確かめることができないが、この「沿革略」にある明治12年西紅梅町創立説は1950年代後半の『法政大学八十年史』編纂時に「実証主義」の観点から否定されるまで、法政大学史では定説となっていたものである。

そして、1907年11月、『法学志林』の発刊第100号を記念し、同誌に掲載されたのが、石原三郎の筆による「法政大学の過去及現在」¹⁵である。

石原は次節で紹介する『法政大学参拾年史』（1909年）の「編輯者」でもあり、明治期の「法政大学史」の編纂者として重要な人物である。しかしながら、石原という人物については、その存在自体全く知られていない。以下では、現段階で資料的に確かめられた限りではあるが、彼の経歴を記しておきたい。

・石原三郎経歴

生没年不詳（本籍地：島根県）。1901年7月、和仏法律学校法律科卒業、同期生には奥村敬太郎（和仏法律学校聴講生優待生を経て、文官高等試験上位合格）、佐竹巳之松（弁護士。法政大学維持員を経て、法政大学常務理事、法政大学校友会会長等を歴任）、守屋荒美雄（帝国書院創業者、関東第一高等学校・吉祥女子中学校・高等学校創立者）らの名が見える¹⁶。

卒業後は帝国商業銀行に勤務¹⁷、1902年6月に法政大学校友会東京支部幹事就任し¹⁸、同年6月には東京支部選出校友会評議員となる¹⁹。1905年頃、東京支部幹事に就任²⁰、同年11月には法政大学校友会幹事就任²¹。

1906年4月、8年間にわたり学校事務を担当していた吉田佐一郎の辞職に伴い、法政大学事務長に就任²²。1907年に「法政大学の過去及現在」を『法学志林』第100号に掲載、信岡雄四郎によると、石原はその当時の『法学志林』編集の中心人物であったという²³。1909年、編集者として『法政大学参拾年史』の刊行に尽力する。

同年11月、法政大学事務長を辞職し、韓国銀行（京城）に赴任²⁴、1920年頃には北海道拓殖銀行支店長（樺太）²⁵、1921年頃には絲屋銀行（旭川）取締役²⁶を歴任。

この経歴にあるように、石原は法政大学の卒業生で、銀行員を務めながらも校友会活動に積極的に参加するなかで、法政大学の事務にも携わるようになり、「法政大学の過去及現在」を執筆した当時は事務長の立場にあったのである。

さて、石原の「法政大学の過去及現在」は事実関係については基本的に先程紹介した「沿革略」に依るものの、「沿革略」とは異なる特徴がある。それは「沿革略」が年単位で主要な事項を記した編年体であったのに対して、「法政大学の過去及現在」では歴史的な時期区分を試みられている点である。

第一期（明治十二年—明治二十二年）

其一 東京法学校 其二 東京仏学校

第二期（明治二十二年—明治三十六年）

第三期（明治三十六年—現在）

石原は上記の時期区分に個別のタイトル等を付けてはいないが、記載された年代及び記述の

内容から、第1期は東京法学社・東京法学校（及び東京仏学校）時代、第二期は和仏法律学校時代、第三期は専門学校令による法政大学時代、と解釈できる。

もう一つ注目されるのは、文末に記された2年後の創立30周年式典に触れた部分である（傍点は原文ママ）。

我が校が梅、富井の両先生を戴いて居るといふことは、我が校の深く光榮とし大に誇とする所で、来る明治四十二年の我が校三十年式典に於ては我我は大いに其功徳を頌せねばならぬ。²⁷

上記の文章から、石原や法政大学総理に就任した梅ら学校経営の中枢にいた人々は、当時既に2年後の創立30周年を記念した式典の開催を意識していたことが分かる。そして、そのことを広く伝えることによって、校友たちや学校関係者たちに30周年に向けた機運の醸成を図ったのであろう。

石原の呼びかけに応えるかのように、翌1908年、法政大学創立30周年事業が開始され、同事業の一環として法政大学史としては初の出版物である『法政大学参拾年史』が刊行されることとなる。

2. 創立30周年事業²⁸と『法政大学参拾年史』の刊行

1908（明治41）年4月26日、大日本麦酒会社にて開催された法政大学校友会春季大会にて、創立30周年記念事業の実施に関わる建議が校友有志69名（代表：横山寛平）により提案され、満場一致で可決された²⁹。同年10月

25 日、法政大学で開催された秋季校友会では事業実施のための寄付金募集の建議が可決され、早急に寄付金の募集が開始され、最終的な寄付金総額は合計 4 万 2903 円 99 銭に達した³⁰。

同年 12 月 25 日に開催された記念事業専務委員会では、式典の開催とともに、『法政大学参拾年史』（以下、『参拾年史』と表記する）を発行し、校友に同著を分配することが決定された³¹。

その後も、記念事業専務委員を中心に、式典の準備が進められ、30 周年記念式典が上野公園不忍池畔の上野精養軒で挙行されたのは、1909 年 4 月 25 日のことであった。式典では来賓に総理大臣桂太郎代理の坂田幹太、小松原英太郎文部大臣、岡部長職司法大臣、寺内正毅陸軍大臣、財界代表の渋沢栄一、駐日フランス大使代理らを迎え、校友、学生らを合わせて 1700 ～ 1800 人が来場したという³²。また、功労者として梅謙次郎総理、富井政章教頭、ボアソナード名誉教頭らの他、創立者として、薩埵正邦の他、「沿革略」に記されていた、橋本胖三郎、大原鎌三郎、堀田正忠、金丸鉄、伊藤修の 5 名、そして元田直³³ にも記念品などが贈られた。

さて、法政大学初の周年史である『法政大学参拾年史』が発行されたのは、式典のわずか 2 日前、4 月 23 日のことであった。同著の「序言」によると、編集担当者の変更があったため、実際の編纂期間は 2 週間程度しかなく、式典に間に合わせるため、短期間で執筆・編集等が行われたという³⁴。

『参拾年史』の奥付によると、編輯者は前節で紹介した石原三郎、発行者は萩原敬之、発行

所は法政大学である。石原については先程述べた通りであるが、発行者である萩原について紹介すると、萩原は 1889 年 1 月に東京仏学校の事務員となった後、20 年以上にわたって法政大学の事務を担当し、『法学志林』の創刊時には編集発行者も務めた人物である³⁵。このように、『参拾年史』は石原、萩原という学校の事務職員が中心となって編纂・刊行されたのであって、彼らは式典の準備という激務に追われながらも、同著の編纂をも担い、無事刊行させたことは驚嘆に値する。その学校への献身的な、粉骨砕身の働きぶりには頭が下がる思いである。

『参拾年史』の章立ては次の通りである³⁶。

第一章 緒説

第二章 学校ノ名称及其規模

第一節 東京法学校

第二節 東京法学校

第三節 東京仏学校

第四節 和仏法律学校

第一目 設立（東京法学校ト東京仏学校ノ合併）

第二目 組織（財団法人ノ設立）

第三目 規模ノ発展

第五節 法政大学

第一目 大学組織ノ由来

第二目 規模其一（日本人教育ノ施設）

第三目 規模其二（外国人教育ノ施設）

第三章 校員

第一節 職員

第二節 役員附山田東次氏小伝

第三節 講師

第四章 学生

第一節 優待生及優等生

第二節 員数

第三節 学友会

第四節 討論会及講談会

第五章 校友

第一節 概論

第二節 校友会

第一目 校友会規則

第二目 校友会ノ功程（図書室及記念式
並ニ基本金）

第三目 校友会各支部

第六章 講義録及法学志林

第一節 講義録附校外生

第二節 法学志林

附録

一 法政大学学則

二 法政大学試験規則

三 外国語専修科規則

四 校外生規則

五 校友会規則及役員

六 校友会各支部規則及役員

この章立てからわかるように、所謂「大学史」にあたる部分は「第一章 緒説」及び「第二章 学校の名称及其規模」であり、前節で紹介した「法政大学の過去及現在」と比すと、より細分化され、これまでの法政大学の学校組織の変遷に沿った構成となっている。

内容については、組織史・制度史的な事実は基本的に「沿革略」に依拠しながらも、各時代の学科構成や寄付行為、もしくは先に紹介した富井の演説の引用により³⁷、一読して歴史の流れが分かるように工夫されており、いわば、これまでの「法政大学史」を総合したものとして

評価できる。

一方で、「緒説」には次のように書かれていることを注意する必要がある。

草創ノ時代ハ文献ノ以テ徴スヘキモノ尠ク記憶又逸シテ資料ニ乏シク加フルニ記録ト伝説ト一致セサルモノアリ之ヲ問ヒ之ヲ質シ以テ真相ヲ究ムルノ時日ナシ降テ近年ニ至ルモ又必スシモ謬漏ナキヲ保セス後日五十年史編纂ノ時ニ及ンテ其足ラサルヲ補ヒ其謬レルヲ正サンコトヲ希フト云爾³⁸

ここから分かるように、『参拾年史』は極めて短期間での編纂を余儀なくされたことから、創立の問題などの事実関係を資料的に確かめることができなかったのである。そのため、どうしても既存の「大学史」に依拠せざるを得なかったのである。『参拾年史』の編纂者は50周年を機に新たな編纂事業が行われることを望んでいたが、次節で述べる通り、50周年ではそうした本格的な編纂事業は行われず、『参拾年史』の編纂者が期待したような編纂事業が実施されるのは戦後を待たねばならなかったのである。

3. 創立50年記念式典における各種講演

1928（昭和3）年5月20日午後1時、法政大学第一校舎大講堂にて法政大学創立五十年記念式典が挙行された。

創立五十年記念事業は準備委員長の法政大学理事秋山雅之介、準備副委員長の法政大学校友会会長横山寛平のもと、岡村玉造（法政大学事務長）、打田傳吉（校友）、今井萬吉（校友・法政大学維持員）、佐竹巳之松（校友・法政大学維持員）、井本健作（予科教員）、武田宣英（校友）、

平貞蔵（経済学部教員）、關春治（校友）らが準備委員に就任し、進められたもので、戦前期の周年事業としては30周年事業に続く第2回目のものであるとともに、戦前期最後の周年事業である。記念式典当日の式次第は次の通りであった³⁹。

開会之辞	委員長 秋山雅之介
挨拶	学長 松室致
祝辞	内閣総理大臣・男爵 田中義一(代理)
祝辞	仏国大使 ロベル・ドビィ
祝辞	文部大臣 水野錬太郎
祝辞	司法大臣 原嘉道
祝辞	商工大臣 中橋徳五郎
祝辞	子爵 後藤新平
祝辞	教職員総代教頭 富井政章
祝辞	校友総代 武内作平
祝辞	学生生徒総代 鍋島甚平
記念品贈呈	校友会会長 横山寛平
閉会之辞	委員長 秋山雅之介
立食	
余興	

式典には「朝野の名士教職員校友学生代表等二千余名参列」⁴⁰し、盛会裡に終了、その後、以下の記念講演会が二日間に渡って開催された⁴¹。

第一日 5月20日午後6時

挨拶 学長 松室致

我国貿易の過去と将来

経済学部主任 経済学博士 木村増太郎

我国取引所の発達

大阪株式会社取引所理事長 校友 上畠益三郎
司法制度の変遷 学部部长 検事総長 小山松吉
母校の特色 東北大学講師 校友 東川徳治

第二日 5月21日午後1時

法政大学五十年観 校友会会長 横山寛平
我邦陪審の本質如何 法学博士 校友 武田宣英
法政大学の過去現在及将来

衆議院議員 校友 高木益太郎

文学的表現の変遷 予科長 野上豊一郎

戦争と平和 法学博士 秋山雅之介

さて、本稿の趣旨から、この五十年記念式典並びに講演会で注目されるのは、校友らによって法政大学の歴史に関する各種の講演が行われたことである。第1日目の東川、第2日目の横山及び高木の講演がそれに当たる。

これらの講演のうち、理由は不明であるが、高木の講演のみ当日筆記(速記)が行われなかったという⁴²。高木は1887年に東京法学校を卒業し、英吉利法律学校の卒業生花井卓蔵と並び称され、代言人(弁護士)・政治家として活躍した人物である。また、『法律新聞』の発行者として法曹界の重鎮であり、当時の校友の中では第一の名士であった⁴³。そのような高木が法政大学の歴史をどのように語ったのか、極めて興味深いものがあるが、残念ながら、今日ではその内容を確認することはできない。そのため、本稿では東川及び横山の講演について紹介したい。

①東川徳治「我母校の五十年記念式に当り懐古の一節及び冀望を述べて祝詞に代ふ」⁴⁴

・東川徳治経歴

1870年3月16日高知県に生まれる。梅清処塾、関西法律学校で学んだ後、1900年に和仏法律学校校外生、1903年に法政大学校外生となる。その後、法政大学総理梅謙次郎の推薦で、台湾で旧慣調査にあたる。帰京後の1917年頃に法政大学講師就任、1921年には岡松参太郎の推薦で東北帝国大学附属図書館事務嘱託、後に法文学部講師となる。『支那法制史論』『支那法制史研究』『典海』等、中国法制史の研究で知られる。1938年に死去⁴⁵。

東川は恩師である梅謙次郎の評伝『博士梅謙次郎』（有斐閣、1917年）の著者としても知られており、その講演では梅の法政大学への貢献、とりわけ、明治30年代後半に梅の主導により法政大学が設置した清国留学生法政速成科を詳しく紹介し、「我母校に於ては宜しく梅博士当年の遺志を継ぎ支那学生を歓迎し保護するの道を講ずると共に本邦学生との精神的和合を計」⁴⁶る必要性を説いている。

なお、『法政大学学友会報』（後の『法政大学新聞』）紙上で梅の功績と破天荒なエピソードを紹介した「梅先生物語」の連載が開始されるのは、東川の講演の翌年、1929年のことである⁴⁷。講演会には、多くの学生も参加しており、東川の講演は学生たちに梅の存在を知らしめるきっかけとなった可能性がある。

②横山寛平「法政大学五十年観」⁴⁸

・横山寛平経歴

1866年10月29日大分県に生まれる。
1886年7月東京法学校卒業(第2回卒業生)。
卒業の年に代言人試験合格、司法省に入り、

裁判官となり、京都地方裁判所を経て、東京地方裁判所民事部長となる。官を辞した後、法政大学理事に就任(1932年まで)、1916年から1929年まで法政大学校友会会長も務めた⁴⁹。

50周年記念事業で準備副委員長を務めた横山は二日目の講演において、「法政大学五十年観」と題して講演を行った。横山は「法政大学五十年観」のなかで、東京法学社の創立の背景として、明治初頭の法典編纂とフランス法との関係性を略述した後、官立の司法省法学校のみでは高まるフランス法学教育の需要をまかない切れず、私立の法律学校の創立が「時代の要求」として求められていたことを指摘している。また、東京法学校の講師陣がフランス法系を中心としながらも、憲法及び不法行為ではイギリス法系の人物が担当していることや和仏法律学校と民法典論争との関係性を詳述するなど、法曹関係者らしい、法律界と学校との繋がりに重点を置いたものであった。

横山の講演でもう一つ注目されるのは、第1回(1885年)卒業生である戸田敬一郎の書簡をもとに、草創期の様子を紹介した部分である。

私は過日第一回卒業生にして曾て山形地方裁判所長たりし戸田敬一郎氏より書信を得ました其一部分を読上げますれば左の如くあります「回顧すれば明治十四年小生入学の当時は神田錦町の民家にて極手狭なる講堂に三、四十名斗聴講至居候位の事にて微々たるものに有之候」云々又多少他岐に涉りますが「小生は三年間斗深川佐賀町に寄寓し雨の降る日も雪の夜も一日と雖も欠

席したる事無之為めに小川町に移転後教頭
ボアソナード氏より勉学の亀鑑たりし戸田
敬一郎氏に贈るといふ仏文の記載ある写真
を贈りて表彰せられ其伝達式は講堂に於て
全生徒を集め薩埵〔正邦〕主幹之を行はれ
大に面目を施し候事に御座候」との文句が
あります。是は一面師弟間の情誼の美しき
ことを語ると同時に他面に於ては生徒の数
が少なければこそ斯く戸田君の事が先生の
目に映じたるものと思はれます⁵⁰

横山が紹介している戸田の書簡からは草創期
の教員と学生の親密なさま、草創期法政大学の
牧歌的な様子が浮かび上がってくる（横山は戸
田の書簡や当時の学生数をもとに、東京法学社・
東京法学校を「寺子屋式の法学校」⁵¹と評して
いる）。

この点に関連して、記念式典で校友総代とし
て祝辞を述べた武内作平（1890 年和仏法律学
校卒業。弁護士・政治家）は、その祝辞の中
で、小川町校舎（東京法学校）時代の富井、嵯
峨根不二郎、松室らの講義風景を紹介したう
えで、東京法学校時代の学生たちの気風が「豪宕、
弊衣」であったことを回想しており⁵²、教職員
総代教頭の富井（第 1 節参照）は大学の「裏
面」史として、明治 30 年頃まで学校の財政は
極めて厳しい状況にあったが、教職員と校友が
一体となって、苦境を乗り越えていったこと、
そして、その時代には、学校として大規模化し
た今日においても保持すべき、「堅実なる精神」
「質実剛健なる気性」があったことを説いてい
る⁵³。

さて、こうした明治期への回想や語りは、当
時の時代思潮や世相と響き合うものがあるので

はないだろうか。『明治事物起源』で知られる
石井研堂の研究者山下恒夫氏は、1924 年に吉
野作造、石井研堂、尾佐竹猛、小野秀雄、宮武
外骨、藤井甚太郎らによって明治文化研究会が
結成された背景として、「関東大震災以後、帝
都の復興が急速にすすむ中、失われたありし日
の東京の面影が懐旧され、ここに澎湃として生
じたのが明治ブームの世相」⁵⁴があったことを
指摘している。俳人中村草田男が「降る雪や明
治は遠くなりけり」と詠んだのはもう少し後、
1931 年のことになるが、1920 年代後半、些
かのノスタルジーを加味しながらも、明治は「歴
史」となったのであろう。

なお、こうした明治期の校友による在学時代
の回想や明治期の学生生活をテーマとした文章
が、その後、校友会によって毎月発行されてい
た『法政大学報』に屢々掲載されるようになって
いく。

「法政大学校友会創立当時の回想」1934 年 8・
9 月

上林敬次郎「我等が母校在学時代を偲ぶ 東京
法学校時代」1935 年 2・3 月

同「薩埵正邦先生のこと」1935 年 11 月

堀諫「在学当時の想出」1936 年 1 月

角田幸吉「母校の昔を偲びつゝ」1936 年 1 月

三條商太郎「今昔物語」1937 年 11 月

杞優生「学生風儀今昔物語」1938 年 7 月

明治の書生「牛肉店と喫茶店」1938 年 11 月

三條商太郎「昔の鉄道の想ひ出」1939 年 7 月

上林敬次郎、船越雄尾、片山房吉、森山三福、
景山六郎、岡本柴三郎、桂田利吉、鳥塚元儀他

「母校の新旧を語る」1939 年 11 月

石井豊七郎「真鍮の墨壺」1940 年 3 月

田井眞孫「お濠に影うつして」1940年3月

上記のうち、石井豊七郎（1895年和仏法律学校卒業。宮城控訴院長、長崎控訴院長等を歴任）は、「各名士のカレツヂ生活の思ひ出」⁵⁵をテーマに「東京朝日新聞」紙上に連載された「往年の学風」シリーズにも登場し、「法政大学の前身」⁵⁶のタイトルのもと、和仏法律学校在学時の学生生活を回顧している。

以上で見たように、50周年記念事業では『参拾年史』で期待されていたような、本格的な大学史の編纂事業は行われなかったが、校友らによって法政大学史に関する各種の講演が行われた。そして、50周年事業の講演の中でも見られた、明治期の校友たちの回想などが徐々に学内誌に掲載されるようになっていったのである。「大学史」の中心となる組織史や制度史の観点からはこうした回想などの資料は取り扱いに困るもの、もしくは二次的な資料とされがちであるが、文化史や学生史の観点から改めて発掘すべき価値を含んでいるのではないだろうか。

4. 「法政大学六十年史」（『法政大学校友名鑑』1941年）

戦前期における最後の「法政大学史」は「法政大学六十年史」（以下、「六十年史」と表記する）である。

「六十年史」は1941（昭和16）年に刊行された島戸賢一編『法政大学校友名鑑』（法政大学校友名鑑刊行会発行）⁵⁷の巻頭に収録されたもので、その章立ては以下の通りである。

序

第一章 東京法学社

第二章 東京法学校

第三章 東京仏学校

第四章 和仏法律学校

第五章 法政大学（専門学校令）

第六章 法政大学（大学令）

第七章 現況

第一節 寄付行為

第二節 学友会

第三節 校友会

上記のように、その章立ては『参拾年史』同様、法政大学の学校組織の変遷に沿ったもので、創立から現在（1941年）までの期間を取り扱っている。

「六十年史」はその「序」に、「〔法政大学は〕其の創立より既に六十年の星霜を重ね、我が教育史上没すべからざる業績は、燦として輝く法政大学六十年史を編纂さるべきものがあるが、本編は、主としての其の概略を記述せるに過ぎず、法政大学六十年史といふは当らず、この種の編纂は、これを他日に求めて、其の完璧を期されんことを切望せざるを得ない」⁵⁸と述べられているように、総頁数四十頁程の「小史」とでも呼ぶべき性格のものであるが、各章（第1から5章まで）を主要な事項に限って約1頁にまとめており、今日から見ても、学校の組織史・制度史として簡にして要を得たものと評価できる⁵⁹。

ただし、同時代を取り扱っている「第六章 法政大学（大学令）」のみは他の章と比較すると詳細であり、五十周年記念事業（1928年5月）、松室致学長の死去（1931年2月）、「青

年日本号」による学生訪欧飛行（1931年5月）などの事項が詳しく説明されている。特に興味深いのが1931年に実施された学生訪欧飛行の部分で、その「画期的の壮挙」⁶⁰から10年以上を経てなお、教職員、学生・生徒、校友ら大学関係者が一体となった記憶されるべき一大イベントであったのだろう。一方で、「六十年史」では、1933年に勃発し、法政大学内を二分した学校騒動「法政騒動」⁶¹について全く触れていない。当時、同騒動により辞職を余儀なくされた野上派の教員たちや野上豊一郎自身が既に大学に復職・復帰を果たしていたにも関わらず、騒動の余波は続いており、未だアンタッチャブルなものであったことがわかる。

また、「六十年史」は1941年に書かれたことから、時局の影響が見られる部分も多々あり、それは先に紹介した清国留学生法政速成科を取り上げた部分に顕著に現れている。「茲に特記さるべきは、梅謙次郎氏時代、法政大学が、支那朝野の希望に応じて、支那留学生を多数収容して、其の教育の衝に当つたことである。南京国民政府主席汪兆銘氏華北政務委員長王揖唐氏等法政大学の出身者として、今日新東亜建設の輝かしき偉業達成に、全世界的舞台に登場しつゝあるがごとき、日支教育界に植え付けたる因縁の浅からざるものがあることは、法政大学の一つの誇りといふべきであらう」⁶²と記されていることからわかるように、日中戦争下において、「大東亜の新秩序」「大東亜共栄圏」の建設が叫ばれるなか、国策と関連付けられながら、清国留学生法政速成科の存在に改めて焦点が当てられ、顕彰されているのである⁶³。

おわりに

以上、本稿では明治30年代から戦時下まで、法政大学の歴史について述べた資料・文献を時代順に紹介してきた。本稿の最後に、これら戦前期「法政大学史」の特徴について述べておきたい。

第一に、戦前期の「法政大学史」は30周年、50周年、60周年といった周年事業との関連で刊行等が行われている点である。この点については、他大学も同様であり、村松玄太氏が近代日本の大学における周年事業に関する先駆的な研究で論じているように⁶⁴、多くの大学で周年事業とともに大学史の編纂が開始されている。周年事業と大学史編纂の密接な関係性は、戦後も、そして、今日も継続していると言えよう⁶⁵。

第二に、本論で詳述したように、戦前期の「法政大学史」は基本的に学者・研究者ではなく、校友たちが中心となって企画・編纂・執筆等が行われている点である。学者・研究者である大学の教員陣が殆ど編纂にかかわっていないということは今日から見れば、奇異に映るかもしれないが、そもそも周年事業自体、校友会の主導によって行われていたことから至極当然のことであったと言えよう。

第三に、『参拾年史』の編纂者自身が自覚しており、『法政大学八十年史』（1961年）の編纂者たちが直面した問題であるが、戦前期の「法政大学史」は所謂「実証主義」の観点からみると、些か疑問符がつく記述が多いという点である。戦前期の「法政大学史」には典拠等が殆ど示されておらず、資料的な裏付けが取れていない記述が散見されるのである。そのため、特に東京法学社の創立時期の問題—明治12年西紅

梅町創立説と明治13年北甲賀町創立説—を中心として、実証史学の洗礼を受けた『八十年史』の編纂者たちによって検証作業が行われることとなるのであるが、『八十年史』から始まり、『法政大学史資料集』(1978年～現在)、『法政大学百年史』(1980年)、『法律学の夜明けと法政大学』(1993年)、そして、『法政大学と戦後五〇年』(2004年)と続く、戦後の大学史編纂の歩みについては別稿にて改めて検討したい。

- 1 「歴代総長・理事へのオーラル・ヒストリープロジェクト」の第1回目では、下森定元総長へのインタビューが行われた。そのインタビュー記録については『HOSEI ミュージアム紀要』創刊号、2021年に『法政大学史資料集 第39集 下森定元総長オーラル・ヒストリー』と題して収録されている。同プロジェクトの概要については、鈴木智道「解題」(同上、所収)を参照されたい。
- 2 本稿は、2021年度全国大学史資料協議会東日本部会総会・研究会(2021年5月28日、法政大学 HOSEI ミュージアムよりオンライン開催)における、講演(古俣達郎「法政大学における大学史編纂の歩みと HOSEI ミュージアムの開設について」)を原型とするものである。講演の機会を与えてくださった同協議会には記して感謝申し上げたい。なお、近現代日本の大学の沿革史全般については、学校沿革史研究会『学校沿革史の研究 大学編Ⅰ』野間研究所紀要第53集、2013年、同『学校沿革史の研究 大学編Ⅱ』野間研究所紀要第58集、2016年を参照されたい。
- 3 本稿では、周年史のみならず、広く法政大学の歴史を記した資料を「法政大学史」と表記する。
- 4 明治期を代表する法学者である富井政章(1858－1935)は1883年に東京法学校講師に就任、1900年から1902年まで和仏法律学校校長を

務めた。その後、1935年に死去するまで長年にわたり、法政大学教頭の地位にあった。

- 5 富井政章「校長富井博士ノ学事報告並ニ訓誨演説」『法学志林』第21号、1901年7月、140－146頁。なお、同資料は『法政大学史資料集』第1集(1978年)及び第32集(2011年)に所収されている。
- 6 同上、140頁(『法政大学史資料集』第1集、39頁、『法政大学史資料集』第32集、56-57頁)。
- 7 法政大学の創立者薩埵正邦(1856－1897)の妻は富井の妹マサである。富井と薩埵は京都仏学校で共にレオン・デュリーに学んだ同門でもあった。
- 8 富井、前掲記事、142頁(『法政大学史資料集』第1集、40頁、第32集、57頁)。
- 9 富井、前掲記事、144頁(『法政大学史資料集』第1集、42頁、『法政大学史資料集』第32集、59頁)。なお、ここで富井が語っている「特色」「方針」は、次節で紹介する『法政大学参拾年史』においてもほぼ同一の内容が記されている。
- 10 三島駒治編『九大法律学校大勢一覧』東京法友会、1898年、13頁。同著には校友の守屋此助が「批評」を寄せているが、この点については指摘していない。
- 11 石井豊七郎「法政大学の前身(下)」『東京朝日新聞』1939年12月19日(『往年の学風』東京朝日新聞社、1940年、216頁)。同資料については第3節及び注55・56を参照。
- 12 薩埵は1890年に和仏法律学校を辞職し、郷里の京都に設置された第三高等中学校の法学教師となった後、1897年、40歳の若さで急逝した。
- 13 「私立法政大学一覧一沿革略」『法学志林』臨時48号、1903年7月。なお、臨時増刊48号には「沿革略」とともに「私立法政大学一覧一本校改称の来歴」が掲載されている(いずれも『法政大学史資料集』第1集に所収)。同資料においても、明治12年の創立とされている。
- 14 同上。
- 15 石原三郎「法政大学の過去及現在」『法学志林』

- 第9巻11号(100号記念)、1907年11月(『法政大学史資料集』第1集、50-55頁、所収)。同資料は、元々、梅総理が執筆する予定であったが、梅が渡韓の準備に追われていたため、梅の命により、石原が起稿し、梅は校閲を担当することとなったという。
- 16 島戸賢一編『法政大学校友名鑑』法政大学校友名鑑刊行会、1941年、13頁。
 - 17 「法政大学事務刷新」『法学志林』第8巻4号、1906年4月、121頁。
 - 18 「校友会東京支部総会」『法学志林』第28号、1902年2月、109頁。
 - 19 「東京支部選出の校友会評議員」『法学志林』第32号、1902年6月、104頁。
 - 20 「東京支部幹事」『法学志林』第7巻5号、1905年5月、107頁。
 - 21 「校友会役員の決定」『法学志林』第7巻12号、1905年12月、120頁。
 - 22 注17と同じ。
 - 23 信岡雄四郎「法学志林の沿革」『法学志林』第9巻11号(100号記念)、1907年11月、282頁。信岡は1888年に東京法学校を卒業、1890年に代言人試験に合格。嚶鳴社に加入し、民権家としても活躍した。校友会の創立時から幹事であり、『法学志林』創刊時から編集を担当していた(霞五郎『法政大学校友会八十年史』1970年、23頁)。
 - 24 「謹告」『法学志林』第11巻11号、1909年11月、「石原三郎君の送別会」同、115-116頁、「十日会」『法学志林』第11巻12号 1909年12月、111-112頁。
 - 25 『大正九年十二月調 法政大学校友名簿』1920年、3頁。
 - 26 『大正十一年十一月調 法政大学校友名簿』1922年、3頁。
 - 27 注15と同じ。
 - 28 私立大学の周年事業としては、法政大学は先発校とも後発校とも言い難い。同じフランス法系の法律学校である明治法律学校(現：明治大学)は1901年7月、「創立二〇年記念式典並第四〇回卒業証書授与式」を挙行し、創立20周年にあわせて田能村梅士『明治法律学校二十年史』が刊行されている(村松玄太「近代日本の大学における周年事業の発生と展開—明治初年から第二次大戦以前まで—」明治大学史資料センター編『大学史活動』第31集、2010年、12頁、阿部裕樹「明治大学における周年事業の歴史と大学史担当セクションの関わり」同、19-21頁)。
 - 29 『法政大学創立満三十週年記念式報告』1909年、1、3-5頁。
 - 30 同上、162頁。
 - 31 同上、24頁。
 - 32 「法政大学設立卅年記念会」『法律新聞』第566号、1909年4月30日。
 - 33 明治期の法律家である元田直(1835-1916)は創立者伊藤修、金丸鉄と同郷(大分県杵築市)の先輩で、1874年に東京神田に法律学舎を設立した。
 - 34 石原三郎編『法政大学参拾年史』1909年、1頁(序言)。『参拾年史』の執筆者は「編輯者」であり、先に「法政大学の過去及現在」を執筆した石原と推測されるが、断言はできない。
 - 35 『法政大学八十年史』1961年、383頁、『法政大学百年史』1980年、152・182頁。
 - 36 なお、『参拾年史』の巻頭には和仏法律学校で教頭を務めたG・アップールによる「私立法政大学ノ講師及ヒ学生ニ贈ル書」が掲載されている。
 - 37 石原、前掲書、4-5頁。
 - 38 同上、2頁。ただし、『参拾年史』は梅と富井による校閲が行われている。
 - 39 『法政大学報』昭和3年6月号、1928年6月、6-16頁。
 - 40 島戸、前掲書、13頁。
 - 41 『法政大学報』昭和3年6月号、1928年6月、17頁。
 - 42 平貞蔵編『法政大学五十周年記念講演集』法政大学、1928年、3頁。
 - 43 高木に関する各種資料は、『法政大学史資料集』第18集、1995年、65-89頁に収録されている。

- 44 東川徳治「我母校の五十年記念式に当り懐古の一節及び冀望を述べて祝詞に代ふ」『法政大学報』昭和3年6月号、1928年6月、4－5頁（平、前掲書、89－94頁）。
- 45 東川の経歴については、江戸恵子「楊舟 東川徳治年譜考」『法学志林』第92巻第4号、1995年3月を参照されたい。
- 46 東川、前掲記事、5頁（平、前掲書、94頁）。
- 47 「梅先生物語」は以下の全3回が『法政大学学友会報』（『法政大学新聞』）紙上に掲載された。「更生する梅博士 若き学徒の胸に 梅先生物語（一）」『法政大学校友会報』1929年10月15日、「エッフェル塔上に巴里人を見下ろした肝ツ玉 梅先生物語（二）」同上、1929年11月26日、「梅先生物語（三） 青年教授の弟子は現国民政府の要人達」同上、1929年12月12日。
- 48 横山寛平「法政大学五十年観」『法政大学報』昭和3年6月号、1928年6月、2－3頁（平、前掲書、127－134頁）。
- 49 横山の経歴については、同上、61－63頁の他、霞五郎『法政大学 物語百年史』1980年、20頁を参照されたい。
- 50 横山、前掲記事、2頁（平、前掲書、129頁）。
- 51 同上。
- 52 武内作平「祝辞」『法政大学報』昭和3年6月号、1928年6月、14－15頁。
- 53 富井政章「祝辞」『法政大学報』昭和3年6月号、1928年6月、12－14頁。
- 54 山下恒夫『石井研堂 庶民派庶民派エンサイクロペディストの小伝』リブレポート（シリーズ 民間日本学者）、1986年、223頁。また、明治文化研究会の一員であった大久保利謙氏は「明治文化研究会は時代が変わり、またある意味では関東大震災で壊滅した明治そのものを掘り起こし、考え直すという前向きの姿勢と、単に明治を懐かしんだり、明治の事物を愛好するという好事家的側面とを、あわせもっていたように思います。」と述べている（同『日本近代史学事始め—歴史家の回想—』岩波書店（岩波新書）、1996年、84頁）。
- 55 『往年の学風』東京朝日新聞社、1940年、1頁。同著は「往年の学風」の連載を書籍としてまとめたものである。
- 56 石井豊七郎「法政大学の前身」『東京朝日新聞』1939年12月17・18・19日。
- 57 同著の編集人・発行人である島戸賢一は1902年愛知県に生まれる。1926年、法政大学法文学部英法科卒、卒業後、第三十六銀行、渡邊商店を経て、1931年に高等文官試験司法科に合格、1934年に弁護士として開業した（島戸、前掲書、84頁）。なお、本文で紹介している「六十年史」の執筆者が島戸であるか否かは不明である。
- 58 島戸、前掲書、3頁。
- 59 なお、「六十年史」では法政大学の学校運営の特徴を法律専門学校時代は「質実」「消極的」、大学昇格以後（松室学長時代）は「積極政策」と対比している（同上、1－2頁）。このような対比は第17回卒業式並びに50周年記念式典での富井の演説と通じるものがある（本稿第1、3節参照）。
- 60 同上、15頁。
- 61 「法政騒動」については『法政大学資料集』第12・13集を参照されたい。
- 62 同上、3頁。
- 63 この点については、拙稿「法政速成科のメタヒストリー」王敏編『日本留学と東アジア的「知」の大循環』三和書籍、2014年を参照されたい。
- 64 村松、前掲論文（注28）参照。
- 65 こうした周年事業に紐付けられた一過性の大学史編纂に対して、恒常的な編纂体制を目

指して設置されたのが、法政大学大学史編纂
室（後の法政大学史センター、現在の HOSEI
ミュージアム）である。

（こまた・たつろう
HOSEI ミュージアム任期付専任所員・准教授）

“History of Hosei University” in Pre-War : From the Meiji 30's to the End of the War

Tatsuro Komata

Abstract

In this article, the author listed a range of materials on the history of Hosei University in pre-war. The oldest materials describing the history of the University are those written during the Meiji 30's. These include a speech on the brief history of the University made by Masaakira Tomii, president of Wafutsu Horitsu Gakko (School of Japanese and French Law) and published in Hogaku Shirin. The brief history stated that the University was originally founded in 1879, which continued to be widely believed until the year was corrected in the publication on Hosei University's 80-year history, created in the latter half of the 1950s and published in 1961.

In 1909, the first publication on Hosei University's history was issued as part of the project to celebrate the 30th anniversary of its founding, with Saburo Ishihara and other staff from the University serving as its editors. It became one of the most prominent representative publications on the pre-war history of Hosei University.

In the project implemented in 1928 to celebrate the 50th anniversary of its founding, a range of lectures was given on the University's history, and campus life in the Meiji period, which was also mentioned in the lectures, began to be introduced in the University's in-house magazine.

In 1941, the 60-year history of Hosei University was described in the Hosei University alumni directory. The document summarized the organizational and institutional history of the University. Some parts of the document were written under the influence of the war, including the part on the intensive course for students from Qing China, which the University provided during the Meiji era.

Keywords: Hosei University, History of Hosei University, Anniversary project, Alumni association, Modern history of Japanese universities, History of the school, University archives